

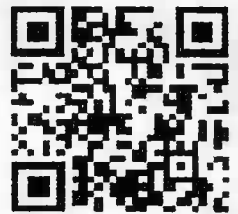
横浜市退職小学校長会



第69号

令和4年8月18日
横浜市退職小学校長会
会長 大久保 重則

ホームページアドレス



巻頭言

間門小の水族館

会長 大久保 重則

昭和30年代の初め、本牧の海の埋め立て計画で地域の漁師や卒業生たちが、何とかこの海を残したいということから、市に働きかけ水族館として残すことになった。当初は、海水や魚は、今の校庭の脇に船を横付けして樽で運んでいた。

しかし、埋め立て工事が進むにつれ、海水、魚も直接運ぶことが困難になり、地元の有志の方や元江の島水族館の館長だった廣崎先生が間門小に在籍していた事からご協力を得て、内式循環装置が出来た。しかし、この装置も順調に作動せず、数々のトラブルが続いた。新しい装置を入れたいが市からの補助は難しく、とうとう休館せざるを得なくなった。47年から約三年間、休館になった。

「何とか復活したい」という地元、卒業生はいろいろ手をつくし、さらには地元の川本工業や廣崎先生のご尽力で51年に再開されるに至った。

しかし、その後の維持管理の担当が転勤になり、水族館がストップしてしまった。私は53年に間門小へ赴任した。水族館担当で初めて中へ入ったら循環機は止まり水槽には魚が一匹もない。中央にコンクリートの大きな楕円形の水槽にアカウミガメだけが一匹何とか泳いでいた。しかし、海水は濁り苦がいっぱい。何から手を付けていいかわからない。自分には判断がつかなかった。その時相談相手になってくださった方がフィッシングセンターの池田さんであった。それから毎日は授業が終ると水槽の掃除、濾過槽の

掃除等々。循環機が修理から戻ってきて再開できたのが七月だった。ところが急きょ校舎全面改築工事が決まり、水族館の建物だけは据え置きになった。「さあ、これから魚を入れるのにどうするか」。漁港へ出かけては漁師さんに水族館に魚が欲しい事を伝えた。自分も北海道の漁師で育った話をしたら、船へ乗ってみるかと言われ、これ幸いと漁師の手伝い。底引き網船、巻き網船への手伝い。やっと水族館への魚の補給が出来るようになった。

間門小での九年間は、春夏秋冬、船が出る日曜日は殆んど海。テレビ局からの取材も多く、市議会議員の視察、外部からの取材も多くなり、市からの補助金も一気に増えた。現在の水族館は内部が新しくなり、卒業生が主体となってフレンドリークラブと名称を変えて年間いろいろな企画を行っている。

今、そしてこれから

高橋 郁枝

コロナが始まって三年、ワクチンは三回した。久しぶりに劇場へ。検温・マスク着用。中高生百二十人のオーケストラ 素晴らしい響き。

今、世界はコロナや戦争で大変な時だというのに。どうすればみんなが安全に暮らせるのだろうか。それぞれ国によって考え方や事情は異なる。だからこそ助け合う事はできないものか。せっかく地球という星の中に生まれたのだから、皆で仲良くしよう。

廃校となった母校

小山 幸子

昭和16年4月、附属幼稚園から横浜国民学校に入学した。だが、縁故疎開を経て戻った時には、中区で吉田、寿、本牧、横浜の四校は廃校となる。

明治6年創立の横浜小学校は昭和20年9月校舎接取のため、吉田小学校に移転し、翌年1月統合廃校とされた。現在校舎は、港中学校と

なっている。近くを通る度に往時の思い出が甦り、ここで学んだ幸せをかみ締めている。



出合いが、つながら

新井 春海

退職後、先輩や同僚との新たな出合いの中で日々の過ごし方、生き方を学び今があります。老犬との散歩と体操を中心に体力の衰えを防ぎ、友人知人の書、絵画、写真展や演奏会を愉しみ感動と刺激を受けています。また、本会の事業フォトさくら、はぜ釣り、見学会等にも参加し先輩同僚との出合いを愉しんでいます。

これからも体力の続く限り続けたいと日々願っています。

「生きる力」を育てる

金子 禎

友人から「命」を預かるのは大変と言われるが、校長退職以来、幼稚園の園長を続けている。五年前、地域の要請もあり、幼保連携型認定こども園にして、一歳から五歳までの幼稚園に衣替えをした。

特に小学校教員出身の園長として人間一生に於て困らない「生きる力」を身に付けて卒園させたいと考え、乳幼児期に身に付く非認知能力を養う事に力を入れている。